

# 小学校における不登校及び不登校リスク群児童支援 のあり方に関する一考察

～スクールカウンセラーの効果的な活用に焦点をあてて～

2014/3

四日市市教育委員会 教育支援課

## はじめに

四日市市では、平成23年度からスタートした第2次四日市市学校教育ビジョンの取組も3年が経過しました。この学校教育ビジョンでは、『生きる力』『共に生きる力』をはぐくむを基本理念に、「めざす子どもの姿」である「輝く よっかいちの子ども」実現のために、「途切れのない支援」「段差のない教育」「家庭・地域との協働」の3つの視点を基盤として、「問題解決能力の向上」「豊かな人間性の育成」「特別支援教育の充実」「教職員の資質・能力の向上」等8つの重点課題を掲げ取り組んでいます。

教育支援課では、学校教育ビジョン実現に向け、教職員の資質・能力の向上を目指して幅広い研修を進めてきました。

とりわけ、教職員一人ひとりのライフステージに応じた資質・能力、実践力を身につけるため、「教師力向上研修」を進めてきました。校園内での日常的なOJT研修や多様な研修活動の充実を図ると共に、自己相互研鑽を活性化してきました。

また、児童生徒の実感を伴った学習理解を図るために、企業が持つ知識・技能・経験を活用した連携授業を行ったり、科学への知的好奇心・探究心を高め、科学的な考えや見方を育てるために、「四日市こども科学セミナー」を開催したりしました。多くの参加申し込みがあり、参加した児童生徒からは好評とする感想が聞かれました。

これらの取組に加えて、本市の課題である「外国語活動・英語教育の推進」「生徒指導・教育相談の充実」「校・園内特別支援教育推進体制の充実」を本年度研究課題に設定し、授業実践や調査・研究を進め、その成果をここに研究調査報告書としてまとめました。これらの研究成果が、教育課題の解決に向けた学校・園の研修・研究において活用されるとともに、日々の教育実践に役立つことを期待します。

最後に、本課の研究調査を進めるにあたって、御指導・御助言いただいた国立教育政策研究所初等中等教育研究部の松尾知明総括研究官、並びに研究協力員をはじめとして調査・実践面で御協力いただいた学校等の関係者の皆様に心から感謝の意を表します。

平成26年3月

四日市市教育委員会教育支援課  
課長 西浦 昌宏

— 目 次 —

I	研究主題	1
II	主題設定の理由	1
III	研究の目的	2
IV	研究の内容・方法	
1	研究の概要	3
2	データ収集と分析	3
3	研究の計画	5
V	結果と考察	
1	市内小学校へのアンケート調査	6
2	抽出小学校への聞き取り調査	12
3	SCへの聞き取り調査	18
VI	総合的な考察	
1	本市の現状と課題	20
2	SC活用の方向性	20
3	SCとの連携	21
VII	研究のまとめ	
1	研究結果	22
2	今後の課題	23
	[引用文献・参考文献]	24
	[資料]	25

## I 研究主題

小学校における不登校及び不登校リスク群児童支援のあり方に関する一考察  
～スクールカウンセラーの効果的な活用に焦点をあてて～

## II 主題設定の理由

近年、本市において不登校<sup>1</sup>児童生徒の増加が、大きな課題となっている。小学校・中学校ともに多少の変動はあるが、昨年度の本市不登校出現率は、全国・三重県に比べて高く、小学校・中学校ともにその対策は急務となっている。

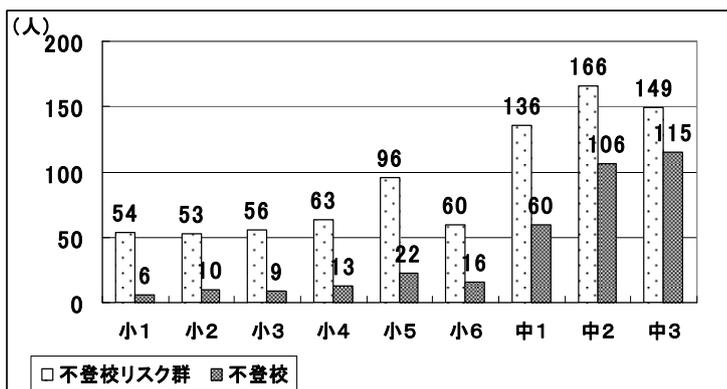
本市教育委員会は、その対策の一つとして平成 23 年度から不登校児童生徒数のみでなく、本市独自の「不登校リスク群<sup>2</sup>」の基準を設定して調査を開始した。その調査結果から平成 24 年度の不登校リスク群が、

中学校においては各学年とも 100 人を超えており、また小学校においても各学年 50 人以上存在することがわかった。本市教育委員会指導課は、平成 24 年度不登校リスク群調査の概要報告の中で、低学年の不登校児童は比較的少ないが、不登校に陥る可能性の高い児童が各学年に 1.9～3.1%の割合で存在し、不登校児童数に関わらず、全ての学年を注視する必要があると報告した【図 1】。

また昨年度の本市研究（四日市市立教育センター研究調査報告書第 391 集，2012）の取り組みとして、小・中学校若手教員対象の不登校児童生徒への支援についての学習会を行った。その際参加教員の半数以上が小学校教員だったことから、中学校に比べ小学校の不登校出現率は低いものの、小学校教員も不登校児童への支援の必要性を感じていることがうかがえた。

以上のことから、不登校対策は、中学校ではもちろんのこと小学校においても、早急に充実させる必要があるといえる。小学校の不登校及び不登校リスク群児童を減らすことは、中学校、ひいては市全体の不登校児童生徒数の減少へとつながると考えられるのである。

今年度から本市教育委員会は、「四日市市スクールカウンセラー派遣事業」を拡大し、昨年度までの「心の教室相談員」に代わり、小学校にスクールカウンセラー（以下 S C）を配置した。これにより県から派遣された S C とあわせて、市内全小学校に S C が配置されることになった。石隈



【図 1】平成 24 年度 不登校リスク群及び不登校人数

注：四日市市教育委員会 平成 24 年度 不登校リスク群調査

<sup>1</sup>文部科学省による定義は、「年間 30 日以上欠席した児童のうち、病気や経済的な理由を除き、何らかの心理的、情緒的、身体的、あるいは社会的要因・背景により、児童生徒が登校しないあるいはしたくともできない状況にある者」となっている。

<sup>2</sup>年間欠席日数 30 日未満の児童生徒のうち、

① 年間欠席 10 日以上の子児童生徒 ②遅刻早退 30 日以上の子児童生徒 ③保健室（別室）登校経験のある児童生徒

①～③いずれかに該当する児童生徒を対象とする。（旅行などによる事故欠席、感染症、怪我の入院や通院によるものは除く）

(1999) は、子どもの教育と生活の場である学校にＳＣが参加することは、教師との協働により子どものアセスメントが行われやすくなることや、問題への早期援助、危機状況へのタイムリーな介入など、その意義は大きい（P.112）と述べている。さらに伊藤（2011）によると、現代における不登校の特徴を一口で表現するとすれば「多様化」であり、そのきっかけとされる要因も多様化している（P. 1）と述べている。心の専門家であるＳＣが市内全小学校に配置されたことは、さまざまな問題を抱えている児童に今まで以上にきめ細かく対応することができると考えられる。そしてこのような対応が、不登校及び不登校リスク群児童への支援へとつながると期待される。

ＳＣと連携した不登校児童生徒へのこのような対策は、他県においても提案されている。群馬県教育委員会「不登校対策マニュアル」や福島県教育委員会「不登校対策資料 Vol. 3 手をたずさえて」では、その項目の一つとしてＳＣとの連携をあげている。また先行研究でも、小学校に派遣されたＳＣが不登校児童を担当する教師らに対して助言を行い、不登校傾向が改善した事例（田島，2008）や、教員がＳＣと定期的なケース会議で具体的に役割分担することにより改善に向かった不登校中学生の事例（船木，2005）など、ＳＣとの連携により、不登校を克服した事例が多く報告されている。

この点本市教育委員会においては、平成 21 年度に作成された「スクールカウンセラー活用の手引き」が本年度改訂され、各学校でＳＣとの連携のもととして役立てられている。しかし、この手引きは、不登校児童生徒対応の視点から、ＳＣとの連携のあり方を検討したものではない。また、本市では、このような観点にたつて、小学校の取り組みの実態を把握した調査は行われていない。

そこで本研究では、各小学校における不登校児童への支援体制やＳＣの活用状況、教員のＳＣに対するニーズやＳＣの教員に対するニーズを調査する。そこから明らかになった課題を通して、本市小学校の現状に合うＳＣを効果的に活用した不登校及び不登校リスク群児童への支援のあり方について考察する。

### Ⅲ 研究の目的

本研究の目的は、本市小学校における不登校及び不登校リスク群児童に対応する支援の実態やＳＣの活用状況、教員のＳＣに対するニーズやＳＣの教員に対するニーズを調査することを通して、本市小学校の現状に合うＳＣを効果的に活用した支援のあり方を考察することである。

## IV 研究の内容・方法

### 1 研究の概要

研究の概要は以下の通りである。

- (1) 市内全小学校における不登校及び不登校リスク群児童への支援の体制やS Cの活用状況を調査する。
- (2) 抽出した小学校にて、不登校及び不登校リスク群児童への支援の体制やS Cの活用状況について、聞き取り調査を行う。
- (3) 効果的なS Cの活用方法について、S Cに聞き取り調査を行う。
- (4) (1)～(3)をもとに、本市の現状に合った不登校及び不登校リスク群児童へのS Cを効果的に活用した支援の方法を探る。

### 2 データ収集と分析

本研究のデータは、(1)市内小学校を対象とした不登校及び不登校リスク群児童に対する支援体制とS Cに関するアンケート調査、(2)抽出小学校への聞き取り調査、(3)S Cへの聞き取り調査をもとにしている。

#### (1) 市内小学校へのアンケート

市内小学校へのアンケート調査は、以下の通りである。

- ① 対象：四日市市内の全小学校（39校）
- ② 時期：平成25年6月
- ③ 内容：不登校対策委員会の有無、対策委員会のメンバー、対策委員会の開催の頻度と時間帯、S Cの活用内容、S C活用についての成果と課題や今後の方向性等
- ④ 方法：教育支援課より各小学校にアンケート調査を依頼し、各校の不登校及び不登校リスク群児童支援の担当教員へ回答を求める。
- ⑤ 分析：以下の2点から結果をまとめ、小学校の現状を考察する。
  - ・市内小学校における支援の実態及び成果と課題
  - ・市内小学校におけるS Cの活用状況及び成果と課題

#### (2) 抽出小学校への聞き取り調査

抽出校への聞き取り調査は、以下の通りである。

- ① 対象：不登校リスク群が多い小学校のうち、S Cの継続配置の有無を考慮し、アンケート結果から特色のある取り組みをしている学校を選んだ。具体的には、以下

の6校である。

A校：特別支援委員会が時間割の中に組み込まれている。SC今年度配置。

B校：不登校対策委員会を単独で開いている。SC長期継続配置。

C校：不登校対策委員会を単独で開いている。SC継続配置。

D校：ケース会議を開いて対応している。SC今年度配置。

E校：SCによる訪問面接の実践がある。SC継続配置。

F校：進学先中学校と同一のSCが配置されている。小・中学校ともにSC継続配置。

② 時期：平成25年7月、11月

③ 内容：7月・・・各校の支援において効果的だったと思われる方法、その成果と課題、現在のSCの主な活用内容や効果的と思われるSCの活用方法、SCの今後の活用予定や要望等

11月・・・7月以降の取り組みとその成果

④ 方法：各抽出校へ指導員が複数で訪問し、校務分掌上SCを担当している教員（教育相談担当者・特別支援教育コーディネーター）及び管理職より、聞き取り調査をする。

⑤ 分析：各校における実践や取り組みを、(1)各校への聞き取り調査の結果、(2)SC活用の具体的な様子や事例、(3)SC活用への要望に分類してまとめる。その結果から、小学校のニーズに対応するためのSC活用の方向性や方法を考察する。具体的に、(1)については、以下の4点からまとめる。

- ・効果的と思われる支援方法
- ・支援における成果と課題
- ・現在のSCの主な活用
- ・今後の活用や要望

また、(2)については、本市教育委員会作成の「カウンセラーの手引き」(2009)を参考に、以下のSCの活用内容7点で分類・整理する。

- ・カウンセリング
- ・教員へのコンサルテーション
- ・児童の行動観察
- ・支援委員会及びケース会議
- ・訪問面接
- ・校内研修会
- ・関係機関との連携

### (3) SCへの聞き取り調査

SCへの聞き取り調査は、以下の通りである。

- ① 対象：抽出小学校SC，SCを兼務している本市教育委員会セラピスト（以下Th）
- ② 時期：平成25年8～11月
- ③ 内容：現在のSCの主な活動内容，教員との連携において困っている点，SCとして心掛けていること等
- ④ 方法：指導員がSCと面談し，聞き取り調査をする。
- ⑤ 分析：SCから聞き取った結果を，抽出校への聞き取り調査の具体的事例や様子と同様にSCの活用内容7点について以下の観点からまとめる。その結果から不登校及び不登校リスク群児童への効果的なSCの活用方法を探り，そのために必要となるSCと教員との連携について考察する。
  - ・活動方法や教員との連携方法
  - ・教員との連携における課題

## 3 研究の計画

研究の計画は、以下の通りである。

月	本研究に関する計画	実施する内容
4月	研究計画立案	
5月	第1回課内研究会議 (第1回国研指導)	
6月	第2回課内研究会議	市内小学校へのアンケート調査実施
7月	第3回課内研究会議 (第2回国研指導)	市内小学校へのアンケート集約考察 適応指導員による抽出小学校への聞き取り調査実施
8月		抽出小学校聞き取り調査集約
9月	第4回課内研究会議	抽出小学校聞き取り調査考察 適応指導員によるSCへの聞き取り調査実施
10月		適応指導員によるSCへの聞き取り調査実施
11月		適応指導員による抽出小学校及びSCへの聞き取り調査考察
12月	第5回課内研究会議 (第3回国研指導) 第6回課内研究会議	
1月	第7回課内研究会議 (第4回国研指導)	研究のまとめ
2月	第8回課内研究会議	

## V 結果と考察

### 1 市内小学校へのアンケート調査

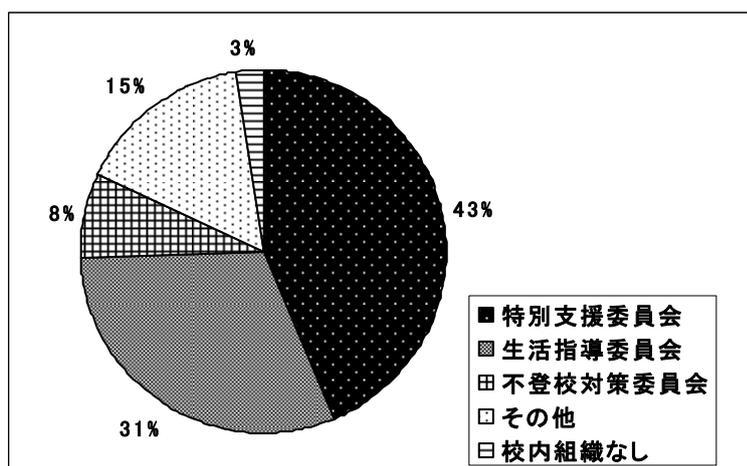
市内小学校における不登校及び不登校リスク群児童への支援の体制やS Cの活用状況を調査するため、市内全小学校にアンケート調査を依頼し実施した。結果は以下の通りである。

#### (1) 市内小学校における支援の実態及び成果と課題

##### ① 結果

##### ア 校内体制について

不登校及び不登校リスク群児童への支援等を話し合う校内組織のある学校は38校で、校内組織のない学校は1校だった。



【図2】 不登校及び不登校傾向児童への支援を行う校内組織

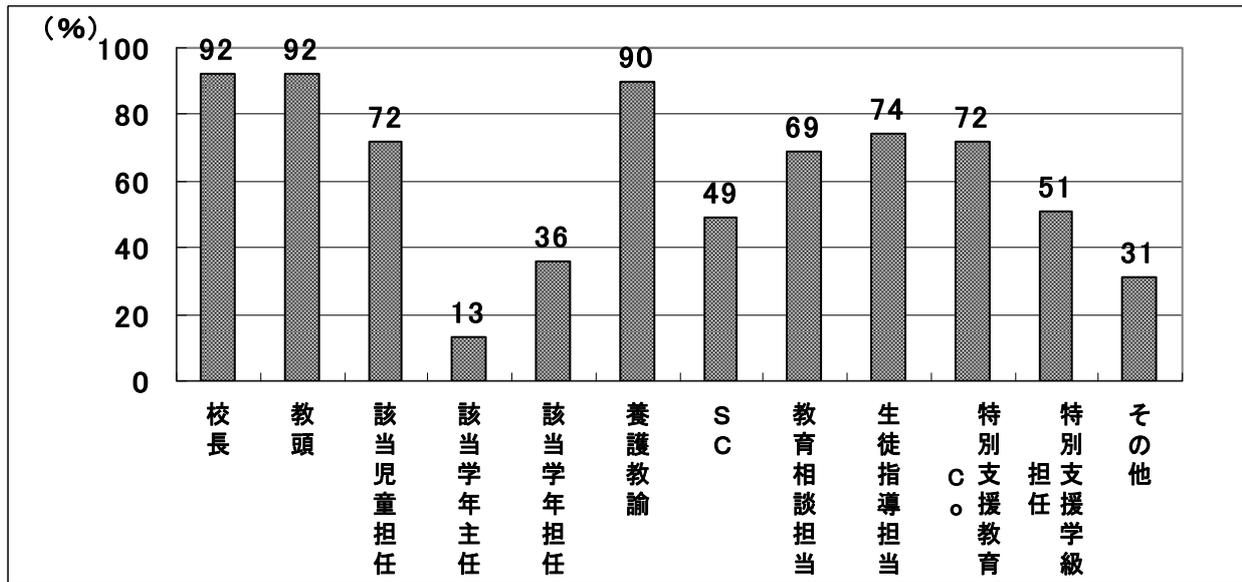
図2の通り校内組織のある学校の内訳は、特別支援委員会が17校(43%)、続いて生活指導委員会12校(31%)、不登校対策委員会3校(8%)、その他6校(15%)となっていた。

その他と回答した学校は、生活指導委員会と特別支援委員会を併用、あるいはそれにケース会議や情報交換会を加えるなど複数の支援会議をあげていた。校内組織のない学校では、学年部で月1回、情報共有し対策を検討する体制が整えられていた。

##### イ 構成メンバーについて

委員会の構成メンバーは、図3の通りである。校長・教頭・養護教諭は90%以上の学校で構成メンバーに含まれ、次いで、生徒指導担当・該当児童担任・特別支援教育コーディネーター(以下特別支援教育C o)・教育相談担当であった。S Cは、約半数の学校で含まれていた。その他では、各学年あるいは学年部の担当者や前年度担任・地域特別支援教育C oなどがあげられていた。

各委員会は、6～12名の人数で構成されていた。

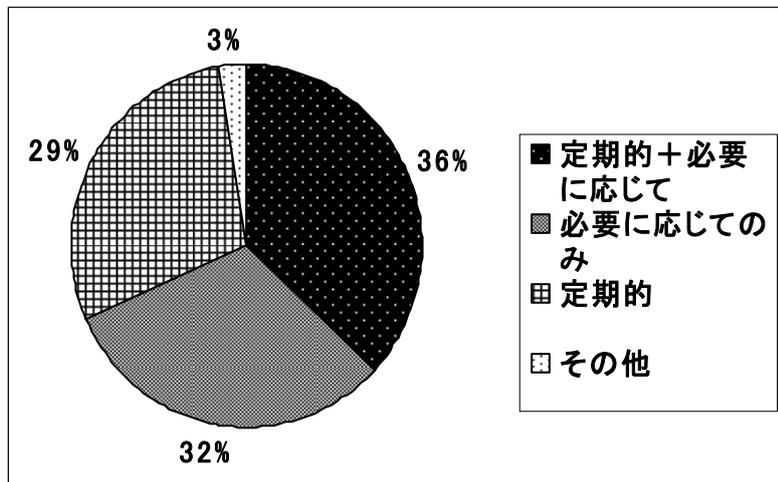


【図3】 委員会の構成メンバー

#### ウ 委員会の開催頻度と開催時間について

委員会の開催頻度は、図4の通りである。

月1回程度の定例会に加えて必要に応じてケース会議等を開く学校が、14校（36%）であ



【図4】 委員会の開催頻度

あった。必要に応じて開催する学校は12校（32%）で、不登校を対象とした委員会を持つ学校2校は、ここに含まれていた。定期的に委員会を開催している学校11校（29%）のうち、毎週開催している学校が1校あり、他は月1回の開催であった。

開催時間については、毎週委員会を開催している学校は時間割に組み込んで開催していたが、それ以外はすべて放課後であった。

## エ 成果と課題

市内小学校における支援の成果と課題は、以下の通りである。

### a 成果

- ・学級担任が一人で抱え込まず、学校全体が共通理解し、連携して対応できた。  
(22校)
- ・委員会で話し合うことで、指導の手だてがさまざまな視点から考えられた。  
(15校)
- ・SCにつながり、対応や方向性を示してもらうことができた。(4校)
- ・関係機関へ相談しやすかった。(3校)
- ・担任が児童に関わりやすいよう学年内で時間割を変更したり、教室に入れないときは管理職の先生や空き時間の先生に対応してもらえたりした。(3校)

### b 課題

- ・保護者の課題が大きく、かかわりがうまくできなかった。(6校)
- ・不登校の背景に多様な原因があり、手だてを考えて支援を続けてもなかなか登校に結びつかなかった。(4校)
- ・定期的な開催なので、タイムリーな対応ができず、事後報告になってしまった。  
(4校)
- ・委員会を開催する時間確保が難しく、定期的に関ることが難しかった。(4校)
- ・支援を考えなければいけない児童が多く、検討の時間が足りなかった。(3校)
- ・支援委員会開催日とSCの勤務日が合わないので、参加してもらえなかった。  
(3校)
- ・小学校の特性として、担任とは関わりが深いですが、関わりの少ない教員は直接的な支援がしにくかった。(2校)
- ・SCや専門機関との連携を探っていかなければいけないと思った。(1校)

## ② 考察

アンケート結果から、市内小学校において不登校及び不登校リスク群児童への支援は、支援委員会を活用し、複数の教員で対応していることがわかった。支援の手だてがさまざまな視点から考えられ、学級担任が一人で問題を抱え込まずに対応することができていた。支援委員会が適宜開催されている学校も多く、必要に応じて柔軟に対応していることがわかった。

支援委員会で、具体的な方向性が示され支援することが成果につながっており、チームとして対応していくことの必要性が各校で認識されていると考えられる。

しかしその一方で、不登校に対する支援の難しさを感じている学校も多い。その大きな要因として、不登校の背景が複雑であるため、教育的な支援が直接成果に結びつかず困っていることがあげられていた。また、支援委員会の時間確保の難しさや、担任以外が直接的な支援に関わりにくいことなど物理的要因を理由としている学校もあった。不登校児童への支援は長期に渡ることも多い。限られた条件の中で、継続可能な校内支援体制を組むことが必要である。

そこで校内支援体制の一つとして、SCとの連携が考えられる。教育的な視点以外の捉えができるSCが加わることにより、支援の幅が広がり見通しを持って対応することができると考えられる。現状では、SCが支援委員会に参加している学校は約半数となっているが、今後、より多くの学校でSCがチームの一員として機能できる体制を考えていくことが必要である。

## (2) 市内小学校におけるSC活用状況及び成果と課題

市内小学校（39校）のうち、平成24年度までにSCが配置されたのは22校、平成25年度に配置されたのは17校である。SCの勤務時間は、29校が192時間（6時間／週×32週）、2校が180時間（6時間／週×30週）となっており、残り8校においては、2校兼務で180時間（6時間／週×30週）となっている。

### ① 結果

#### ア SC活用コーディネートを担う校務分掌について

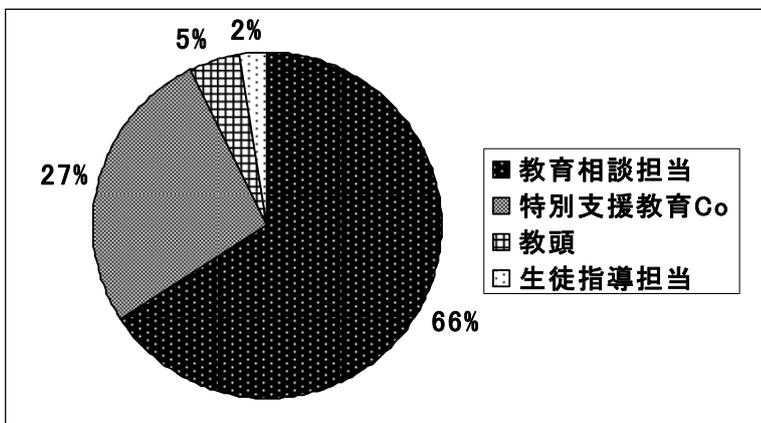


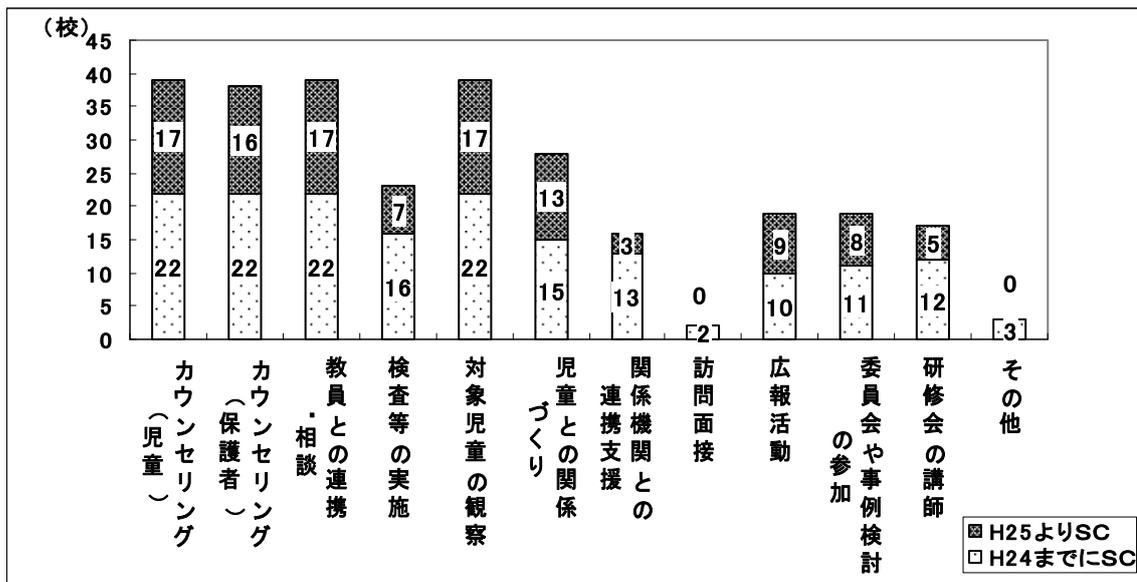
図5の通り、SC活用コーディネートを担う校務分掌は、教育相談担当が27校（66%）で一番多く、次に特別支援教育Co.が11校（27%）、教頭が2校（5%）、生徒指導担当が1校（2%）であった。このうち2校は担当者が、複数配置であった。

【図5】 SC活用コーディネートを担う分掌

## イ SCの活用内容について

図6の通り、児童や保護者へのカウンセリング、教員との連携・相談、対象児童の観察は、ほぼ全学校で行われていた。反対に実施の少ない活用内容は、訪問面接、関係機関との連携支援や研修会の講師であった。

またSCの今年度配置校は継続配置校と比べ、児童との関係づくりや広報活動の割合が高く、関係機関との連携支援や研修会の講師は少なかった。その他では、SSTの実施やケース会議・不登校以外の相談の場である特別支援委員会への参加があげられていた。



【図6】 SCの活動内容

## ウ 成果と課題

市内小学校におけるSC活用の成果と課題は、以下の通りである。

### a 成果

- ・担任とは違った専門的な見地から意見やアドバイスを得ることができ、支援の方向性を持つことができた。(23校)
- ・子育てに悩んだり、精神的に不安定になったりする保護者が、カウンセリングを受けたことで前向きに考えられるようになり、子どもも安定することができた。(12校)
- ・相談した児童に落ち着きが見られるようになってきた。(8校)
- ・専門的見地から、検査をしてもらったり、他機関へつないでもらったりした。学校で検査してもらえるので、保護者も一歩を踏み出しやすかった。(5校)

- ・同じSCが継続していることで、児童・保護者・教員が安心して相談できた。  
(3校)
- ・保護者も「第三者」という安心感から相談しやすく、専門的なアドバイスというこ  
とで受け入れやすかった。(2校)
- ・専門的な立場から、子どもの見方をわかりやすく教えてくれ、対応の方向性を示し  
てくれた。(1校)

## b 課題

- ・来校日が少ないので、子どもとふれあう時間がとれず、関係がつくりにくかった。  
(9校)
- ・相談件数が多く、勤務時間内に、担任と相談する時間が持てなかった。(8校)
- ・週1回の勤務なので、すぐに対応が必要になったとき、タイムリーに相談にのって  
もらえなかった。(4校)
- ・たくさんのSC相談の要望があった。しかし回数が決まっているため、予約がいっ  
ぱいで、継続的な支援の周期が長くなったり、難しくなったりした。(4校)
- ・水曜日がSCの訪問日となり、校内外の会議と重なり、教員との連携が取りにくか  
った。(4校)

また少数であるが、以下のような意見もあった。

- ・SCの助言を生かすためには、まず校内での審議を経て、慎重に進める必要性も感  
じられた。(1校)
- ・職員へのコンサルテーションはあるが、具体的な方向性が見えなかった。(1校)
- ・不登校児童は登校しないので、SCとの面談もかなわなかった。(1校)

## エ 今後のSC活用について

今後のSC活用については、研修会や事例検討会に関する項目が多くあげられていた。  
詳しくは、以下の通りである。

- ・校内研修会で、職員向けのカウンセリング研修や事例検討会を開き、職員の資質向上・  
教育相談体制の充実を図りたい。(17校)
- ・特別支援委員会や不登校傾向児童についてのケース会議等へSCに入ってもらい、子  
どもへの対応をともに考えてもらいたい。(9校)
- ・児童・保護者のカウンセリングを、定期的に継続したい。(9校)
- ・定期的にグループでのソーシャルスキルトレーニング(以下SST)を行っていき  
たい。(1校)

## ② 考察

アンケートの結果、各校のＳＣ活用は、児童や保護者へのカウンセリング、教員との連携・相談、児童の観察が、ほぼ全学校でなされており、その成果が多くあげられた。ＳＣの専門性を活かし、児童への新たな支援の方向性が見いだせたり、児童や保護者に対して個別に心理的なアプローチを進めたりした成果が現れていると考えられる。

しかし児童や保護者への個別の対応は、ＳＣの時間的な制約の中では、課題ともなっている。限られた保護者や児童への支援にとどまり、それ以外の活動時間の確保が難しい。特に、児童に直接関わっている教員との相談時間が持てないことは、非常に大きな問題であると思われる。

また今後のＳＣ活用において、多くの学校が、校内研修や事例検討会などへのＳＣの参加を希望していた。ＳＣが校内研修や事例検討会に参加することは、学校全体の教育相談の機能を高めるためにも、有効な手立てであり、回数を重ねることが必要であろう。現在実施している学校は、まだ半数以下ではあるが、このような取り組みを増やしていくことが、児童や保護者へのよりよい支援につながっていくと考えられる。

以上のことから限られた勤務時間の中での、ＳＣの効果的な活用を探っていく必要があると思われる。

## 2 抽出小学校への聞き取り調査

不登校リスク群が多い小学校の中から、アンケート結果の中で不登校及び不登校リスク群の児童に対して特色のある支援を行っている6校を抽出し、指導員による聞き取り調査を行った。結果は、次ページの通りである。

(1) 各校への聞き取りの結果

	A校（中規模校）	B校（大規模校）	C校（大規模校）
対象	<ul style="list-style-type: none"> <li>・時間割の中に組み込んだ特別支援委員会（毎週開催）</li> <li>・S C今年度配置</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・不登校対策委員会を単独で開催（必要に応じて開催）</li> <li>・S C長期継続配置</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・不登校対策委員会を単独で開催（必要に応じて開催）</li> <li>・S C継続配置</li> </ul>
効果的と思われる支援方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・時間割に組み込んでいるので、教室での児童の様子を直接見に行くことができる。</li> <li>・担当者が委員会のメンバーにいますので、生徒指導上気になる子ども、話題にあげていける。</li> <li>・特に気になる子は、放課後に担任を入れてケース会議を開く。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・不登校傾向が見られたら、担任からの発信で、できるだけ早い時期に会を開き、情報共有する。</li> <li>・担任以外の全職員で児童対応のシフトを組むこともある。</li> <li>・教育相談週間を設け、担任が一人ひとりの児童の話聞く。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・支援委員会で方向性を出し、管理職や同学年の担任等でチームを組み、連携して対応する。</li> <li>・必要に応じて緊急招集し、ケース会議を開く。</li> <li>・家庭訪問や聞き取りは、複数の教員で行く。</li> </ul>
支援における成果（○）と課題（△）	<ul style="list-style-type: none"> <li>○担任が一人で抱え込まない。</li> <li>○気になる児童の情報を毎週あげることができ、少しずつの変化を追っていける。</li> <li>△該当児童の担任が委員会に入ることが難しい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○担任が一人で抱え込まない。</li> <li>○早めの対応ができるため、状態を改善できる。</li> <li>△方向性を決めて対応するので、一定の成果は得られるが、保護者を変えるのは難しい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○情報共有がしっかりなされるので、長期休業中に家庭訪問し、学年・学期始めの登校を促すことができる。</li> <li>△校内の支援体制は整えられるが、保護者の協力を得ることが難しい。</li> </ul>
現在のS Cの主な活用	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保護者や児童のカウンセリング（保護者中心）</li> <li>・児童の行動観察</li> <li>・教員へのコンサルテーション（保護者は記録、児童は口頭）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保護者のカウンセリング</li> <li>・児童の行動観察</li> <li>・教員へのコンサルテーション</li> <li>・発達検査</li> <li>・関係機関との連携</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保護者や児童のカウンセリング</li> <li>・児童の行動観察</li> <li>・教員へのコンサルテーション</li> <li>・関係機関との連携</li> <li>・児童へのS S T・発達検査</li> <li>・支援委員会へ参加</li> </ul>
今後の活用や要望	<ul style="list-style-type: none"> <li>・短い勤務時間における効果的な活用や連携</li> <li>・コンサルテーションの時間確保</li> <li>・勤務時間の延長</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ケース会議への参加（勤務時間帯の変更あり）</li> <li>・夏季校内研修会で、教育相談についての研修の講師</li> <li>・S Cの継続勤務</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・S C勤務日以外の不登校傾向児童へのタイムリーな相談</li> </ul>

	D校（中規模校）	E校（大規模校）	F校（中規模校）
対象	<ul style="list-style-type: none"> <li>・特別支援委員会の他に、必要に応じてケース会議を開催</li> <li>・SC今年度配置</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・SCによる訪問面接の実践あり</li> <li>・SC継続配置</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小中同一SC</li> <li>・小・中学校ともにSC継続配置</li> </ul>
効果的と思われる支援方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ケース会議では、より具体的な支援方法を立てることができる。</li> <li>・SCや地域特別支援教育Coが日程を合わせケース会議に参加できることで、多面的な支援方法を考えることができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・月1回の特別支援委員会の前に企画委員会を開き、特別支援委員会での視点を絞る。</li> <li>・時間が合えば、特別支援委員会に、地域特別支援教育CoやSCも参加する。</li> <li>・学校独自の支援ファイルで、情報を申し送り、次年度への指導へ活かす。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・月1回の特別支援委員会と、必要に応じて生徒指導委員会の中でも話し合う。</li> </ul>
支援における成果(○)と課題(△)	<p>○担任が一人で抱え込まず、オープンに話し合える雰囲気ができた。</p> <p>△病気を抱えている保護者への対応は、関係機関などとも連携して支援をしているが、改善には至っていない。</p>	<p>○地域特別支援教育Coからは、児童への具体的な支援方法を提案してもらえらる。</p> <p>○SCが保護者のカウンセリングをすることで、保護者が安定し、児童の状態も改善してきた。</p>	<p>○担任が一人で抱え込まない。</p> <p>○情報を共有することにより、教員が連携し合って対応できる。</p>
現在のSCの主な活用	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保護者のカウンセリング</li> <li>・児童の行動観察</li> <li>・教員へのコンサルテーション（記録より口頭重視）</li> <li>・ケース会議や特別支援委員会への参加（勤務時間帯の変更あり）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保護者や児童のカウンセリング（保護者中心）</li> <li>・児童の行動観察</li> <li>・教員へのコンサルテーション</li> <li>・特別支援委員会への参加</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保護者や児童のカウンセリング（保護者中心）</li> <li>・児童の行動観察</li> <li>・教員へのコンサルテーション</li> <li>・1学期末の保護者懇談会の時にSC相談</li> <li>・発達検査</li> <li>・特別支援委員会やケース会議への参加</li> </ul>
今後の活用や要望	<ul style="list-style-type: none"> <li>・夏季校内研修会での、SCによる研修会。</li> <li>・SCの継続勤務</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ケース会議への参加。</li> <li>・コンサルテーションの時間確保</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・SCの継続勤務</li> </ul>

## (2) SC活用の具体的な様子や事例

学校から聞き取ったSC活用の具体的な様子や事例を、本市教育委員会作成の「カウンセラーの手引き」(2009)を参考に、以下のSCの活用内容7点に分類し、整理した。

### ① カウンセリング

全ての学校からSCの主な活用としてあげられたのは、カウンセリングで、その中でも特に保護者のカウンセリングを中心に行っていた。保護者のカウンセリングの成果として、児童への関わり方を具体的に示されたり、子育ての相談ができたりすることで保護者が安定し、それが児童の安定や再登校につながった事例もあげられた。また学期末の個人懇談会にSCの相談日を設けた学校もあった。子育てに不安を抱えながらもなかなか時間の取れない保護者にとっては好評で、それを機会に保護者とSCにつながった例もあった。

一方、児童のカウンセリングは、児童自身が来談する場合と教師に勧められて来談する場合があった。教育相談週間を設け、担任が一人ひとりの児童と面談し、そこからSCにつながり手だてをとっている学校もあった。また不登校児童や1時限分の相談時間を要する児童は、放課後に時間を取り、保護者の送迎で来談する場合もあった。教室に入りづらい児童にSSTを行うことで改善に向かった事例もあった。

### ② 教員へのコンサルテーション

どの学校も、コンサルテーションによる児童支援への成果はあげられていたが、SCの限られた勤務時間の中での時間の確保に苦慮していた。小学校の場合、SCが担任と話ができるのは放課後になることが多く、十分な時間が取れないことが大きな問題となっていた。

### ③ 児童の行動観察

SCが、授業中や休み時間・給食・掃除の時間に、カウンセリングにかかわる児童や、教員が気になる児童の観察を行っていた。児童椅子に名前を貼り、教室の後ろからでも児童を把握しやすいよう工夫している学校もあった。

しかしカウンセリング件数が増えると、観察の時間を確保することが難しく、カウンセリングとカウンセリングの間のわずかな時間で行っている学校もあった。

#### ④ 支援委員会・ケース会議

各校の支援の体制は整えられ、特に不登校リスク群児童への早期対応としての不登校対策委員会やケース会議の開催は校内の組織の中で位置づけられていた。しかしＳＣの支援委員会やケース会議への参加は、どの学校も希望していたが、実際に参加できていた学校は半数であった。

その中で定期的にＳＣ参加のケース会議を持ち、不登校リスク群児童への支援を続けたことで、状態が改善に向かう成果をあげている学校もあった。この事例では、ＳＣが保護者への定期的なカウンセリングと並行してケース会議へ参加したことで、保護者への支援の方向性と児童への支援の方向性を一致させることができていた。そして、より具体的な支援方法が考えられ、それぞれの担当が役割分担をして支援を行えたことが改善につながっていた。

#### ⑤ 訪問面接

不登校児童への支援の一つとして、夏休みにＳＣが訪問面接をしていた。児童が校舎内でカウンセリングを受けることが難しかったため、２学期の登校に向け、夏休みにＳＣが訪問面接をした。しかし、時間的な問題からＳＣの訪問の継続が難しく、１回で終わったこともあり、再登校へつなぐことはできなかった。見通しを持った支援をする必要があった。

#### ⑥ 校内研修会

夏季校内研修会の中で、ＳＣに講師を依頼し研修を行った学校もあった。学校のニーズに合わせ研修テーマを決め、教育相談に関する内容で研修会を行っていた。ＳＣの専門的知識や技術を学ぶ場を持つことで、教育相談における教員の技量向上につながった。

#### ⑦ 関係機関との連携

学校だけで対応できない場合や支援が難しい場合は、ＳＣの見立てを参考に支援委員会を通して、医療機関や本市教育委員会教育支援課等の関係機関と連携していた。ＳＣから保護者へ関係機関を紹介することで、保護者も受け入れやすいという成果も得られていた。

### (3) ＳＣ活用への要望

どの学校も、ＳＣの勤務時間の延長と継続勤務を望んでいた。

日々の勤務時間不足だけでなく、勤務日が限られているため児童へのタイムリーな支援ができないことや、勤務する曜日が固定されているためＳＣとつながれない保護者がいることなどの意見もあげられていた。

また児童の様子はもちろん、地域の特徴や保護者の様子など学校内外のことをＳＣが把握することは、よりの確な支援につながることから、同一ＳＣの継続勤務を要望する声が大きかった。

#### (4) 考察

聞き取り調査の結果、抽出校において、不登校及び不登校リスク群児童への支援の体制は、よく整えられていた。担任は登校しぶりの兆候が見られるとすぐに支援委員会に相談をかけ、支援の方向性等を話し合うことができていた。また各校とも同学年の教員や管理職など担任以外の教職員も加わり、連携して児童へ対応していた。時間割に組み込んでの開催は、毎週話し合いができる反面、時間が短いことや担任が参加できないことなど難しい面も見られた。

抽出校におけるＳＣの活用も、保護者のカウンセリングを中心に行われていた。児童の発達を促す上で、家庭の役割は大きく、ＳＣの専門性を活かした保護者へのカウンセリングは、多くの成果をあげていた。またコンサルテーション、あるいはＳＣの定期的なケース会議への参加により、教員がＳＣと連携して支援したことが、児童の状態の改善につながった例もあげられていた。

しかしアンケート同様、各校の問題点として、限られた勤務時間の中での教員とのコンサルテーションの時間の確保や、ケース会議・校内研修会への参加の難しさがあげられていた。また訪問面接も時間的な問題から継続は難しく、成果をあげるには至っていなかった。

これまで、ＳＣ活用の中心はカウンセリングと考え、多くの時間を費やしてきた。しかし、以上のことから、効果的なＳＣの活用を探り、随時その方法を見直していく必要があると考えられる。

また、どの学校においても、ＳＣの継続勤務が要望としてあげられた。不登校及び不登校リスク群児童への支援は、長期に渡ることが多い。同じＳＣが継続して支援することは、教員にとって心強いことである。しかし、同一ＳＣの継続勤務は、いつまでも可能というわけではない。そこで、ＳＣが交代しても変わらぬ支援ができる学校組織や、無理のない支援を長く続けていくためのＳＣ活用方法を考えることも、重要となってくる。加えて、ＳＣ活用における学校のシステムやＳＣ活用のコーディネートを担う校務分掌の担当者（以下コーディネーター）の役割を、見直し考えていく必要性もあると考えられる。

### 3 SCへの聞き取り調査

抽出校に勤務するSC及び本市教育委員会に勤務するSC経験のあるThへ、指導員による聞き取り調査を行った。

#### (1) 各SCへの聞き取り調査の結果

SCから聞き取った活動内容を、抽出小学校への聞き取り調査と同様の7点において、活動や連携の方法、連携における課題をまとめた。

カウンセリング	方法	対象：児童及び保護者 つながり方：本人の希望や、教員からの勧め 予約方法：窓口の教員（担任・コーディネーター・管理職）、またはSCが受付 対応：保護者相談が多く、状況に応じて頻度を調整し実施 児童の場合は、時間・場所・同席者において柔軟に対応
	課題	システム（予約方法、時間、相談室の使い方、記録の保管、回覧方法等）の確立 カウンセリング前後の情報交換の時間確保
コンサルテーション	方法	カウンセリング後：保護者や児童の様子と内容、支援の方向性について相談 児童観察後：SCの見立てをもとに、支援の方向性について話し合い 伝え方：文書や口頭で実施 担任もしくはコーディネーターや管理職に、放課後や空き時間を利用し実施
	課題	必要性の理解不足 時間確保
児童の行動観察	方法	対象：教員や保護者からのニーズに応じて実施 SCにつながる可能性のある児童 SCが気になる児童 時間：授業中や休み時間、給食・掃除時間などの時間 コーディネーターが設定した観察計画に応じて実施
	課題	観察前の児童の様子や担任の困り感の情報提供 コーディネーターによる観察時間の設定

支援委員会及びケース会議	方法	<p>ＳＣの参加：勤務日は、可能な限り出席</p> <p>欠席時は、資料をもとにコンサルテーションを実施</p> <p>支援方針：教員との異なる視点での見立てや支援の方向性を示唆</p> <p>今後の児童や保護者の支援についての共通理解</p>
	課題	<p>参加のための時間調整</p> <p>教員からの参加要請が少数</p>
訪問面接	方法	<p>ねらい：不登校児童の家を訪問し、保護者や児童をカウンセリングにつなぐこと</p> <p>行き方：事前に連絡をとり、担任も同行</p>
	課題	訪問のための時間調整
研修会	方法	<p>ＳＣの参加：校内研修会や、ＰＴＡ主催の講演会の講師</p> <p>内容：ＳＣの専門性や得意分野を活かし、学校のニーズに合わせて実施</p>
	課題	年間計画への位置づけ
関係機関との連携	方法	<p>つなぎ方：教員に情報提供し、学校長の判断で実施</p> <p>専門機関の情報を保護者に紹介</p> <p>専門機関への情報提供</p>
	課題	四日市市の各専門機関の情報把握

## (2) 考察

聞き取りの結果、ＳＣは、カウンセリングよりもコンサルテーションを重視したいと考えていた。実際問題として、ＳＣがすべての児童や保護者に対して直接支援することは、不可能である。教員にコンサルテーションをすることにより、ＳＣは教員を通して間接的に児童の支援を行うことができると捉えていた。

またＳＣは、支援委員会やケース会議に積極的に参加したいと考えていた。不登校及び不登校リスク群児童の支援には、問題を多面的に見立てていくことが必要である。ＳＣが支援委員会やケース会議に参加し、教員とは違った視点を提供することにより、新たな見立てや手だてを考えることにつながる。このようにＳＣと教員がお互いの専門性を活かして相談する場を増やすことが、効果的なＳＣ活用の一つであると考えられる。

一方、コンサルテーションを重ねることは、児童や保護者へ対応する教員の力量を高めることにもつながる。ＳＣを講師とした校内研修会の開催も同様である。個々の教員の力量が向上

すれば、児童理解が深まり児童の困り感にすばやく対応したり、子育てに不安を抱える保護者へ適切なアドバイスをしたりできるようになる。すなわち、不登校及び不登校リスク群児童の初期対応や未然防止、また保護者の安心感などへもつながっていくと考えられる。

効果的なＳＣ活用を行うために必要となるのは、コーディネーターの役割などを含めた学校システムの構築である。ＳＣが学校組織の一員として力を発揮できるような体制や、ＳＣとの情報交換やコンサルテーションなどの連携の体制を、学校が主体となつてつくるのが大切である。そして毎年の見直しを行うことで、ＳＣの個性やそれぞれの学校のニーズにあった学校システムをつくっていくことにつながると考えられる。

## VI 総合的な考察

本市の現状に合う不登校及び不登校リスク群児童へのＳＣと連携した支援のあり方を、以下のよう

に総合的に考察した。

### 1 本市の現状と課題

本市の小学校において、どの学校も不登校及び不登校リスク群児童に対して、支援委員会を活用し、対応できる体制は整えられていることがわかった。担任一人に任せるのではなく、チームとして支援をしていく重要性も認識されていた。しかし、不登校の原因が多様化や複雑化しているため、限られた時間的・人的条件の中での対応に、支援の難しさを感じている学校は多かった。

また本年度より全校配置となったＳＣについては、各校とも積極的に活用しようとしており、カウンセリングを中心とした支援によって成果をあげていた。一方で支援委員会やケース会議への参加や校内研修会の講師等を希望しているものの、実施している学校はいずれも約半数であった。どの学校も、限られた勤務日数や時間の中でのＳＣ活用を模索していることがわかった。

### 2 ＳＣ活用の方向性

今後のＳＣ活用においては、カウンセリング中心の活用を見直す必要がある。これまでのようにカウンセリング中心の活用では、ＳＣの支援が特定の児童や保護者に限られてしまううえ、ＳＣに頼った支援になってしまう。児童や保護者に日々直接対応するのは教員であり、支援の主体は教員である。これらの視点から、限られた時間の中で、不登校及び不登校リスク群児童へのＳＣ活用を効果的に行うために、以下の３点を提案する。

１点目は、コンサルテーションを中心とした活用である。教員がＳＣとコンサルテーションを重ねることにより、より多くの児童や保護者が、教員を通してＳＣの間接的支援を受けられる。

また教員が児童への指導において困り感を持ったときに、早めにＳＣからコンサルテーションを受けることで、不登校の未然防止につながると考えられる。特に「欠席３日目シート<sup>3</sup>」であげられた児童についてＳＣからコンサルテーションを受けることは、不登校及び不登校リスク群への早期対応の有効な手立てになると考えられる。さらに、コンサルテーションを重ねることは、教員自身の力量を高めることにもつながっていくと思われる。そのためには、固定化したカウンセリング数を減らしたり、ＳＣの勤務時間をずらしたりするなど各校の実態にあった工夫をすることが必要である。またＳＣがカウンセリングや児童観察をする際に、教員が必要な情報やそのねらいをはっきりと伝えておくことで、コンサルテーションをより短時間で成果のあるものに行うことができるようになる。

２点目は、支援委員会やケース会議へのＳＣの参加である。支援委員会やケース会議には、さまざまな視点からの情報がたくさん集まる。その会議にＳＣが参加することは、専門的な視点からのアセスメントが加わり、よりの確な支援の手立てや方向性を探ることができると考えられる。不登校への早期対応・早期介入の重要性は、これまでの本市研究において述べられているとおりである。ＳＣが会議に参加することは、不登校及び不登校リスク群児童へのより効果的な早期対応へもつながっていくであろう。そしてこのような会議の積み重ねが、教員の力量を高め、タイムリーな対応につながっていくと考えられる。また不登校及び不登校リスク群児童には、継続的な支援も必要である。ＳＣの支援会議やケース会議への継続的参加が望まれるところだが、勤務時間や曜日の都合で、すべてに参加することは難しいだろう。ＳＣが参加しやすいような会議の運営や方法、及びＳＣが参加できないときの手だてを工夫する必要がある。

３点目は、ＳＣの専門性に学ぶ研修会を実施することである。支援委員会やケース会議は限られた教員の参加になるが、校内研修や事例検討会は、全教員を対象として行うことができる。不登校の原因が多様化している現在、学校生活になじみづらい、あるいは教員の指導が入りにくいなど、不登校につながる傾向を示している児童が多く存在している。ＳＣの専門性を活かした研修会をもつことは、一人ひとりの教員の教育相談における力量を高めることになり、児童へのきめ細やかな支援につながっていくと考えられる。年間計画の中に研修会を組み込み、学校のニーズに合った研修内容を設定していくことが大切と考える。

### 3 ＳＣとの連携

抽出小学校への聞き取りにおいて、ＳＣの継続勤務が強く望まれていた。児童や学校・地域の状況を理解しているＳＣが勤務していることは、学校にとって大変心強いことである。しかしＳＣとの関係性に頼りすぎる連携は、ＳＣの交代によって、それまでの活動ができなくなることもつながりかねない。そこでＳＣとの連携について、以下の２点を提案する。

---

<sup>3</sup> 本年度（平成 25 年度）、本市教育委員会教育支援課より提案された、連続欠席 3 日の児童生徒を対象とした支援のための情報共有資料【資料 2】。

1点目は、SC活用システムの構築である。SCとの連携を細かい部分まで決め、文書化するのである。カウンセリングを例にあげると、SCへの予約の取り方、授業中の児童のカウンセリングの有無やその手続き、SCとの情報共有の方法、また相談室の使い方など、各校の実態に合わせ細かい部分までつくる。そしてそれらを、職員全体で共有することが必要である。SC活用システムは、それぞれの学校ニーズに合わせて構築するものであるが、SCの意見をふまえて、ともに考えていくことが必要であろう。さらに毎年、SC活用システムの見直しを行い、少しずつ学校に合ったシステムを構築する。そして毎年職員への周知徹底を図り、理解されることが重要であろう。

2点目は、連携の要であるコーディネーターの役割を明確にすることである。コーディネーターは、学校の情報を広く集約し、その上でSCにつながる優先順位を決めたり、SCのスケジュールや時間調整をおこなったりする必要がある。コンサルテーションの時間が取れないときの仲介役を担ったり、チームとして支援するための段取りをしたりと、あらゆる面でのフォローが求められる。また支援委員会やケース会議を必要に応じて適宜開催するなど、学校の運営にも関わることが多い。SCとの連携におけるキーパーソンは、コーディネーターであるといえる。また情報集約の面から考えると、学級担任をする者が一人でコーディネーターを務めることは、かなり負担が大きい。本市小学校においては、管理職、特に教頭には情報が集まりやすくなっている。本市でも2校の学校がすでに行っているように、教頭がコーディネーターの一端を担うことも、有効な手立てであると考えられる。

いずれにせよ、まずは、各学校におけるニーズを把握することである。学校ニーズに合ったSC活用やシステムを構築していくことが重要である。

## **VII 研究のまとめ**

本研究は、「市内小学校へのアンケート調査」「抽出校への聞き取り調査」「SCへの聞き取り調査」をもとに、本市小学校における不登校及び不登校リスク群児童への支援体制とSCの活用状況を把握し、本市の現状に合ったSCを効果的に活用した支援のあり方について分析・考察した。

### **1 研究結果**

調査した結果、本市の現状に合うSCを効果的に活用した不登校及び不登校リスク群児童への支援のためには、SCの活用の見直しとSC活用のシステムの構築について考える必要があることがわかった。

不登校及び不登校リスク群児童への対応は、早期の支援と継続的な支援が必須である。その要因が多様化している現在、SCの心理的アプローチをより多くの児童・保護者へ有効に活用する

ことは、不登校及び不登校リスク群を減らす一助につながると考える。そのためには、現在のよ  
うなカウンセリング中心のＳＣの直接的な支援から、コンサルテーションを中心とした支援や支  
援委員会などへのＳＣの参加といったＳＣの間接的な支援へ、その活用を見直していくことが必  
要であると考え。これによりＳＣからの支援の幅が広がるだけでなく、教員の教育相談におけ  
る力量を高めることにもつながり、児童へより早くきめ細やかな支援ができると考えられる。

また現在ＳＣの勤務時間は、不足しているという声が多く、限られた時間の中での活用に苦慮  
していた。ＳＣ活用を間接的な支援中心へと見直すことは、同時に時間的な問題の解決にもつな  
がっていくであろう。

さらにこのようなＳＣ活用ができるシステムを、各学校で構築することが必要である。そして  
次年度に向け、より学校のニーズに合った支援が行えるよう、毎年、ＳＣとともにシステムの見  
直しを行い、それぞれの学校やＳＣに対応したシステムを構築することが重要である。これによ  
りＳＣの勤務年数やＳＣの交代の有無にかかわらず、安定した支援を続けていくことができると  
考えられる。

## 2 今後の課題

今後の不登校及び不登校リスク群へのＳＣ活用の課題には、次の２点がある。

第一に、小・中学校連携においてのＳＣ活用を考えていくことが必要である。今回の調査では、  
小学校側から小・中学校連携に関する意見はあげられなかった。しかし、小６から中１への不登  
校児童生徒の増加は、本市において大きな問題となっている。「小中不登校連携シート<sup>4</sup>」の活用  
に加え、ＳＣが小・中学校の引継ぎへ関わることは、中１ギャップの防止など小・中学校連携に  
おいて大きな役割を果たすと考える。

第二に、教員とＳＣが積極的にコミュニケーションを取り合うことである。教員とＳＣが日ご  
ろからかかわりを持ち、それぞれの特性を理解して意思の疎通をしていくことが、連携したきめ  
細かい児童支援につながっていくと考える。

市内全小学校へのＳＣ配置は、今年度始まったばかりである。今後も継続してＳＣの効果的な  
活用方法を探っていくことが望まれる。

---

<sup>4</sup> 昨年度（平成 24 年度）、本市教育委員会教育支援課より提案された、不登校リスク群児童についての中学校への引き継ぎ資料【資料  
3】。

## [引用文献]

- 石隈利紀（1999）学校心理学―教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス 誠信書房
- 伊藤美奈子（2011）不登校は今どうなっているか 児童心理 臨時増刊No.933 金子書房

## [参考文献]

- 伊藤美奈子・平野直己〔編〕学校臨床心理学・入門 スクールカウンセラーによる実践の知恵  
有斐閣アルマ
- 黒沢幸子 森俊夫 元永拓郎 明解！スクールカウンセリング 読んですっきり理解編 金子書房
- 群馬県教育委員会（2007）不登校対策マニュアル
- 仙台市教育委員会（2010）小学校におけるスクールカウンセラーの効果的活用
- 田島充士（2008）ネットワーク活用型心理援助を目指した不登校児童支援におけるスクールカウンセラーと教師の連携モデル 教心第50回総会
- 東山紘久（2002）スクールカウンセリング 創元社
- 福島県教育委員会（2010）不登校対策資料 Vol. 3 手をたずさえて
- 船木智美（2005）スクールカウンセラーと教員の機能的な連携 やまぐち総合教育支援センター
- 松岡靖子（2011）スクールカウンセラーが学校現場で機能するための活動と工夫について―教師との連携に焦点を当てて― 名古屋大学大学院研究紀要
- 四日市市立教育センター研究調査報告 第389集「学校における不登校及び不登校傾向生徒への効果的な支援方法の研究 ～登校支援委員会での取り組みを中心に～」
- 四日市市立教育センター研究調査報告 第391集「不登校児童生徒への理解を深める支援方法に関する一考察 ～若手教員に焦点をあてて～」

【資料1】各小学校へのアンケート（6月）

「小学校におけるスクールカウンセラーを活用した組織的な不登校児童支援に関する研究」  
に係るアンケートのお願い

四日市市適応指導教室

学校名（                      小学校）                      記入者名（                      ）

\*下記の項目について、該当する項目に○印をつける、もしくは記述にてお答えください。

1. 不登校及び不登校傾向児童への支援等を話し合う校内の組織について

○ 不登校及び不登校傾向児童の支援等について、話し合う校内組織はありますか。

- a ある                      b ない（⇒裏面へ）

→「aある」と答えた方に質問します。

(1) 主にどこで話し合いますか。

- a 不登校児童を対象とした支援委員会  
b 生徒指導委員会（生活指導委員会）  
c 特別支援委員会  
d 教育相談委員会  
e その他（                      ）

(2) 委員会の構成メンバーをお答えください。（複数回答可、担当を兼ねている場合はすべて○を付け、兼ねている担当を下記にお書きください）

- a 校長      b 教頭      c 該当児童担任      d 該当学年主任      e 該当学年担任  
f 養護教諭      g SC      h 教育相談担当      i 生徒指導担当      j 特別支援教育 Co  
k 特別支援学級担任      l その他（                      ）

\*兼ねている担当〈例：hとj〉（                      ）

(3) 委員会は、どれくらいの頻度で開かれていますか。

- a 定期的（                      に                      回）  
b 必要に応じて（どんな時ですか。⇒                      ）  
c その他（                      ）

(4) 委員会の開催の時間帯は、いつですか。

- a 時間割に組み込まれている（                      曜日                      時間目）  
b 放課後（                      曜日                      開始時刻                      :                      ）  
c その他（                      ）

(5) 校内組織での支援について、成果や課題をお聞かせください。

- ① 成果  
  
② 課題

→1で「b ない」と答えた方に質問します。

- (1) 不登校及び不登校傾向児童について、誰が、どのように支援をしていますか。

[

]

- (2) 校内組織がない理由を、お書きください。

[

]

**2. SCの活用について、質問します。** **〈全員の方がお答えください〉**

- (1) SCの活用について、コーディネートする校務分掌(担当)をお答え下さい。

( )

- (2) SCの活動内容をお答えください。(複数回答可)

- a 児童に対するカウンセリング
- b 保護者に対するカウンセリング
- c 教員との連携・相談
- d 検査等の実施
- e 対象児童の観察
- f 休み時間や給食時間を利用した、児童と関係づくり
- g 関係機関との連携支援
- h 訪問面接
- i 広報活動(カウンセリング便りの発行など)
- j 不登校について話し合う委員会や事例検討会への参加
- k 研修会の講師(いずれかに○をつけてください⇒対象:教員 児童 保護者)
- l その他( )

- (3) SCの活用について、成果と課題をお聞かせください。

① 成果

② 課題

- (4) 今後、SCの活用について、どのように考えていますか。

(2)の選択肢から選び、具体的な内容があればお書きください。

〈例: j 夏季校内研修会などで、事例検討会を開き、職員のレベルアップを図りたい。〉

ご協力、ありがとうございました。

【資料②】 欠席3日目シート

回 覧	校長	教頭	養護	SC	支援委員会担当	不登校対策担当	学年主任	担任

「 <b>」さん欠席3日目シート</b>					記入者(担任)		
※小中不登校連携シート <input type="checkbox"/> あり <input type="checkbox"/> なし					記入日		
					年	月	日
ふりがな 名前	年	組	番	男 女	当月の 欠席日数	4月からの 欠席日数	昨年度の 欠席日数
					日	日	日

《委員会やSCからの意見や情報》	《担任としてできること》	《周りができること》
		次回支援委員会 月 日

<b>1 初期対応</b>	<b>4 児童生徒の様子</b>
(1)1日目の電話連絡の反応 ( 月 日) <input type="checkbox"/> 肯定的 <input type="checkbox"/> 否定的 <input type="checkbox"/> どちらでもない	(1)欠席時の家庭での過ごし方 <input type="checkbox"/> 未確認 <input type="checkbox"/> 聞いている(誰から ) *詳細 ・好んで行っている活動( ) ・家庭で学習を実施している <input type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/> 未確認
(2)2日目の家庭訪問の反応 ( 月 日) <input type="checkbox"/> 肯定的 <input type="checkbox"/> 否定的 <input type="checkbox"/> どちらでもない	(2)登校に対する本人の意識 <input type="checkbox"/> 未確認 <input type="checkbox"/> 大変強い <input type="checkbox"/> 強い <input type="checkbox"/> 弱い <input type="checkbox"/> 大変弱い
(3)保護者から学校への連絡 <input type="checkbox"/> 3日間とも保護者から欠席の連絡があった <input type="checkbox"/> 学校から欠席の確認電話をした。( 本人 ・ 保護者 ) <input type="checkbox"/> 保護者・本人と連絡がとれない	(3)登校を拒否する様子 <input type="checkbox"/> 未確認 <input type="checkbox"/> 激しく訴える <input type="checkbox"/> 朝起きない <input type="checkbox"/> 準備はするが登校できない <input type="checkbox"/> 送り出す人がいない <input type="checkbox"/> その他 [ ]
<b>2 考えられる欠席理由(複数可)</b>	(4)最近1ヶ月の様子
<input type="checkbox"/> 病気・けが( ) <input type="checkbox"/> 学習面の遅れ・特定の教科からの回避 <input type="checkbox"/> 保護者が病気であるといっているが、登校しぶりがみられる <input type="checkbox"/> 集団になじめず些細な理由で、学校を休む傾向 <input type="checkbox"/> 友達関係のこじれ <input type="checkbox"/> 保護者の都合( )で登校しない <input type="checkbox"/> その他 [ ]	①登校方法 <input type="checkbox"/> 自力登校 <input type="checkbox"/> 保護者が送迎 <input type="checkbox"/> 教師や友達の迎え <input type="checkbox"/> その他
<b>3 他機関との関係の有無</b>	②登校時の様子 <input type="checkbox"/> 授業には出席している <input type="checkbox"/> 授業に参加できないことがあった。 (理由 ) <input type="checkbox"/> その他( )
<input type="checkbox"/> なし <input type="checkbox"/> 未確認 <input type="checkbox"/> あり <input type="checkbox"/> 北勢児童相談所 <input type="checkbox"/> 民生委員・主任児童委員への相談 <input type="checkbox"/> 教育支援課への相談 <input type="checkbox"/> 適応指導教室への相談 <input type="checkbox"/> 発達総合支援室 <input type="checkbox"/> あさけ支援センター <input type="checkbox"/> YESnet <input type="checkbox"/> 家庭児童相談室 <input type="checkbox"/> 民間施設への相談・通院( 施設) <input type="checkbox"/> 医療機関への通院・入院( 病院) <input type="checkbox"/> その他 [ ]	③教師との会話 <input type="checkbox"/> 自然に会話できる <input type="checkbox"/> 会話できる教師とできない教師がいる <input type="checkbox"/> 聞かれると答えるが、会話が續かない <input type="checkbox"/> 会話を拒否する
	④教室に話ができる友人が <input type="checkbox"/> いる <input type="checkbox"/> いない <input type="checkbox"/> 未確認
	⑤休み時間の様子 <input type="checkbox"/> 友達と過ごしている <input type="checkbox"/> 居心地が悪い様子がある <input type="checkbox"/> 一人でいることが多い <input type="checkbox"/> 未確認



【資料③】小中不登校連携シート

小中不登校連携シート		6年 組	出席番号 番	(ふりがな) 名前	小学校卒業	男	女
四日市市立		中学校進学		小学校卒業			
6年生の状況 (担任 )	欠席日数	日	遅刻	日	別室(保健室)登校	有	無
			早退	日	(場所:		)
5年生の状況 (担任 )	欠席日数	日	遅刻	日	別室(保健室)登校	有	無
			早退	日	(場所:		)
4年生の状況 (担任 )	欠席日数	日	遅刻	日	別室(保健室)登校	有	無
			早退	日	(場所:		)
<b>【欠席理由・きっかけ】</b> <input type="checkbox"/> 病気・けが・体の不調 ( ) 友人との関係 <input type="checkbox"/> 学習面での課題 <input type="checkbox"/> 家庭環境の変化 ( ) <input type="checkbox"/> その他 ( ) <input type="checkbox"/> 不明							
<b>【本人の様子(状態)】</b>					<b>特記事項(あれば)</b>		
<b>(性格)</b> <input type="checkbox"/> まじめ <input type="checkbox"/> いつもおとなしい <input type="checkbox"/> にこやか <input type="checkbox"/> 楽観的 <input type="checkbox"/> 興奮しやすい <input type="checkbox"/> 自己中心性がある <input type="checkbox"/> 緊張しやすい							
<b>(行動)</b> <input type="checkbox"/> おおむね意欲的 <input type="checkbox"/> 無気力ないし消極的 <input type="checkbox"/> 非行傾向がある <input type="checkbox"/> 落ち着きがない <input type="checkbox"/> 嫌なことから避けようとする <input type="checkbox"/> 過呼吸 <input type="checkbox"/> 相手の気持ちを理解できない <input type="checkbox"/> 気分の浮き沈みがある <input type="checkbox"/> 発達障害(疑い含) [LD ADHD 高機能自閉症 アスペルガー] <input type="checkbox"/> 乱暴な言動がある <input type="checkbox"/> 自傷行為(リストカット等)がある							
<b>(学習の様子・学力)</b> <input type="checkbox"/> 一斉での指導で理解し行動できる <input type="checkbox"/> 自分の意見が話せる <input type="checkbox"/> 集中が持続しない <input type="checkbox"/> 集団活動ではおどおどする <input type="checkbox"/> 極端に苦手なものがある <input type="checkbox"/> 全体的に学力の遅れがみられる							
<b>(友人関係)</b> <input type="checkbox"/> 良好 <input type="checkbox"/> 特定の子だけよい <input type="checkbox"/> 孤立している <input type="checkbox"/> 他人の評価を気にする <input type="checkbox"/> 学校以外で遊ぶ友達がいる <input type="checkbox"/> いじめ被害の経験がある <input type="checkbox"/> いじめ加害の経験がある <input type="checkbox"/> 自分から仲間に入れない							
<b>(健康生活面)</b> <input type="checkbox"/> 給食で好き嫌いが多く <input type="checkbox"/> 服装が不潔である <input type="checkbox"/> 忘れ物が多い <input type="checkbox"/> 身の回りの整理整頓ができない <input type="checkbox"/> 睡眠のリズムが乱れやすい <input type="checkbox"/> 不安感が強い <input type="checkbox"/> 不調を訴え、保健室に行きたがる							
<b>【学校での好きな活動】</b>				<b>【学校での苦手な活動】</b>			
<b>【保護者・家庭の状況】</b> <input type="checkbox"/> 保護者からの欠席連絡がない <input type="checkbox"/> 提出物や集金の提出が滞りがちである <input type="checkbox"/> 些細なことで、保護者から問い合わせがある <input type="checkbox"/> 虐待、または疑いがある <input type="checkbox"/> 学校と主に連絡を取り合える人 ( )							
<b>【関係機関との連携】</b> <input type="checkbox"/> なし <input type="checkbox"/> スクールカウンセラー <input type="checkbox"/> 教育支援課相談窓口 <input type="checkbox"/> YESnet <input type="checkbox"/> 適応指導教室 <input type="checkbox"/> 発達総合支援室 <input type="checkbox"/> 医療機関 <input type="checkbox"/> その他							
<b>【指導の経過】</b> 本人に対して行った工夫や配慮・支援							
<b>【その他または中学校に特に配慮してほしいこと期待すること】</b>							
					担任(記入者)		

※このシートは、不登校児童生徒の支援のために活用するものであり、その目的以外には活用しません。

**小学校における不登校及び不登校リスク群児童支援  
のあり方に関する一考察  
～スクールカウンセラーの効果的な活用に焦点をあてて～**

〔執 筆 者〕 四日市市適応指導教室 指導員 古森 ゆかり  
四日市市適応指導教室 指導員 市森 幸子  
四日市市適応指導教室 指導員 渡辺 由紀

〔指導・助言〕 国立教育政策研究所 総括研究官 松尾 知明

---

研究調査報告 第394集

**小学校における不登校及び不登校リスク群児童支援  
のあり方に関する一考察  
～スクールカウンセラーの効果的な活用に焦点をあてて～**

発 行 平成26年3月20日  
発行所 四日市市教育委員会教育支援課  
四日市市諏訪町2番2号  
電話 (059) 354-8149  
FAX (059) 359-0280

---